能登・富山紀行

事務局長　池田良穂

3 月に入って新コロナウィルス禍で「自粛」「自粛」の大合唱で、旅行するのも憚られる状況ですが、地方の観光業界からは悲鳴が上がっています。感染の拡大防止と経済の悪化の防止の両方が大事ですが、うまく両立ができないものかと思案しています。

4 月に入って能登にでかけるこにしました。目的は能登半島の輪島の沖に浮かぶ舳倉島(へぐらじま)への定期船を見ること。1976 年に出版した「日本の旅客船」に載せる写真をとるために、その前年に出かけていましたが、なんと 45 年ぶりということになります。当時は、まだ大学院生だったころで、研究室旅行の担当することとなり、舳倉島での合宿を企画しました。研究室の学生からは「なんでそんな辺鄙な島に!!」というブーイングは上がったのですが、それを押さえての旅行で、舳倉島に 2 泊した後、輪島で解散してから能登半島の小型船を追いました。七尾湾に浮かぶ能登島には橋が架かっておらずフェリーが結んでいましたし、能登半島から佐渡へ渡るフェリー「かもめ」も就航していました。

さて、今回の能登行きについては、まず輪島周辺の新型コロナウィルス情報を自治体から入手、さらに輪島と七尾のホテルからも最新情報を入手して危険性はないことを確認。さらに列車はやめて、車で行くことにしました。

堺の自宅から車で約 6 時間。舳倉島への定期船は 1 日 1 便で、朝 9 時に輪島を出港して、15 時半に戻ってきます。航海時間は 90 分です。朝早く出ると、戻ってくる姿を撮影できるので、6 時過ぎに出発して 14 時には輪島港に着きました。午前中までの雨も上がり、快晴になっていて期待をしましたが、輪島港には新鋭船「希海」(のぞみ)が停泊していました。海が荒れてこの日は欠航だったのです。港の近くのホテルに入ると、お客が減っているとのことで大歓迎されました。

しかし、翌朝も「希海」は欠航。快晴でしたが波が残っているようでした。この日は、七尾にある温泉宿「加賀屋」に泊まることにしていましたが、まずは富山新港まで移動して、港内の県営フェリーと初対面しました。これまでも会員の方々からの情報で、このフェリーのことは知ってはいましたが、これまで行く機会がなかったのでよい機会でした。

この日の宿は、七尾市の和倉温泉の加賀屋。いろいろな旅行情報で「素晴らしい温泉宿」ということでしたので一度泊まってみたいと思っていました。こちらも到着すると、宿泊客が激減しているそうで、大歓迎されランクアップの 3 間もある広い部屋にしてもらえました。食事もレストランから部屋食に。館内は 3 つの宿泊棟からなり、中央の宿泊棟は 4 つのシースルーのエレベーターが上下して、さらに館内の池の上には浮かぶようなバーがあり、館内各所のショーラウンジでは各種のイベントがあり、まるでクルーズ客船のよう。

翌朝、輪島を 9 時に出港する「希海」の姿を写してから堺に帰ろうと思っていましたが、船会社に電話してみると「本日も欠航」という留守番電話でした。これで 3 日間の欠航なので、やはり離島苦はいまでもあることを実感しました。

走行中の姿をカメラに収めるのは次回に、ということで帰路に着きました。

輪島

漁船で溢れる輪島漁港の一画に、へぐら航路㈱が運航する「希海」(のぞみ)が停泊していました。

「希海」(のぞみ)は、2019 年に釜石の小鯖船舶工業で建造された。98 総トン、全長 36.5m、幅 6.5m、最大速力 23.5 ノット。

船側のブルワークには輪島のお祭りの絵が描かれていました。

ホテルの窓からは輪島漁港の出口がよく見えていました。欠航が 3 日間続き、一度も「希海」の出港の姿は見られませんでした。

輪島－舳倉島航路の歴代船

昭和 37 年「桐丸」が最初の定期船として就航
「あすなろ丸」
「くれない丸」
「へぐら」
「ニューへぐら」
「希海」(のぞみ)

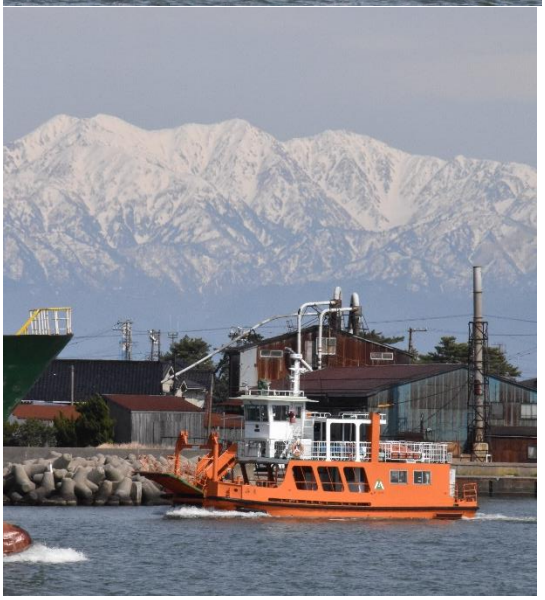
1975 年に筆者が乗船した「くれない丸」。能登半島の沿岸航路を手広く運航する能登商船の 1 隻だった。

富山新港

富山新港の県営の港内フェリーは、越ノ潟駅の近くから出ます。

フェリーには「海竜」と「こしのかた」の 2 隻がありますが、この日は「海竜」が運航されていました。朝夕は 1 時間に 4 便、昼間は 30 分に 1 便で、航海時間は 4 分ほどです。料金は無料で、自転車と原動機付き自転車の利用が可能です。

港の入り口にかかる新湊大橋とほぼ平行にフェリー航路があります。橋の向うに保存船「海王丸」の姿が見えます。



対岸から出港してくる「海竜」の後ろには、立山連峰がそびえています。

僚船「こしのかた」は停泊して整備中でした。

保存船「海王丸」の姿です。